



全体写真 (2017年3月現在)

商船大学校 建設工事

三井住友建設株式会社 国際支店 商船三井大学校作業所 所長

栗田一志

Kazushi Kurita



世界で活躍する
日本の建設企業

その集大成として自営商船大学設立を計画。当社が設計施工を担当している。工事は、約二二二二(東京ドーム約二八個分)の敷地面積に総延床面積約三〇、〇〇〇平方メートルの新設大学を建設する。主要建屋として、実船を模した研修棟(Ship-in Campus)、教育棟、学生寮、複合施設の四棟を建設する。研修棟の外観は船のデザインで、建物周囲のプールと相まって名前の通り「キャンパスの中の船」をコンセプトとした。屋外施設としては競技用トラックと外周路、その他建屋を整備する。開校は二〇一八年六月を予定し、最大九〇〇名の学生が学ぶアジア・太平洋地域では最大規模の私立商船大学となる。当現場では、スラブ・梁・壁・階段にプレキャスト工法を採用している。プレキャスト工法とは工期短縮ならびに品質向上を目的として、建物に使用するコンクリートの構造部材を工場のような施設で製作し、現地に運搬し組立てる工法である。年間の約半分が雨期であるフィリピンでは、天候に影響されずに構造部材を製作できるこの工法が非常に有効である。当現場では広大な敷地内にプレキャスト製作ヤード(写真参照)を建設し、製作・運搬をすべて場内で行い施工を進めている。これは工期厳守のための施工時間の短縮や、現場打設に比べコンクリートの品質管理を向上させるメリットがある。

工期は二〇一六年六月から二〇一七年十月で、施工は最盛期を迎えている。二〇一七年三月現在、約一、〇〇〇名のスタッフが働いており、安全管理及び品質管理を徹底し、これまで数多くのプロジェクトで培った経験と技術を活かし、工期内の竣工を目指している。

フィリピン共和国での当社の施工実績

当社国際支店において、フィリピンは歴史のある海外拠点であり、二〇一五年には二〇周年の節目を迎えた。マニラ事務所が日本政府によるODAのプロジェクト(インフラ土木案件や病院等建築案件)を統括し、現地法人であるSMCCフィリピンズ社が日系企業を中心にローカル企業、そして外国企業も手掛けている。土木案件の実績は、主に橋梁・道路建設、土地造成やダム工事である。建築案件の実績は、プラント施設、事務所ビルやコンドミニアムなどを有する。近年はフィリピンへ進出する日系企業の生産・流通施設を数多く手掛けている。

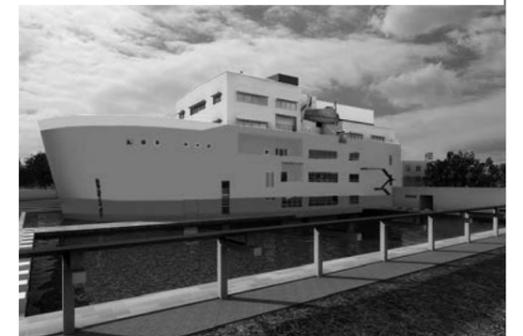
最後に、海外で働く日本人として、現地及びナショナルスタッフへの尊敬の念を忘れず、彼らにとって魅力的な職場にすることを心掛けて日々の業務に取り組んでいる。技術移転やCSR活動を通じて、この国の経済発展へ貢献するべく、プロジェクトを進めている。

フィリピン共和国の紹介

一九九〇年代まで、フィリピンの経済成長率は、ASEAN主要国のうち最下位であった。かつては「アジアの病人」と呼ばれるほど経済不振が深刻化していたが、近年の経済成長率は目覚ましく、一人当たり国内総生産(GDP)は約三、〇〇〇ドル、直近のGDP成長率は二〇一五年で六%、二〇一六年も六・七%を見通し、二〇一二年以降の経済成長率は、ASEAN主要国の中でもトップクラスである。人口は、二〇一四年には一億人を突破、出生率は三・〇八人と東南アジアで最も高い数字を誇っており、引き続き安定的な人口増加が続くことが想定され、豊富な労働力の供給が長期的に期待できる。



完成予想図



Ship-in Campus 完成予想図



プレキャスト製作ヤード

工事概要

(株)商船三井は、船舶運行での高い安全基準を支える船舶の育成プログラムを実施しており、若い世代で人口が構成されているのが最大の強みであり、国民の平均年齢は約二三歳である。つまり生産年齢人口が、圧倒的に多いことになる。そして、学校教育でも英語が広く用いられているため、国民の八割が英語を話すことができるのもこの国の魅力である。東南アジア最大の英語圏であり、この英語力を武器に多くのフィリピン人がOFW(Overseas Filipino Workers / 在外フィリピン人労働者)としてアジアのみならず世界各地で活躍している。